童

2015 年 6 月 3 日.

大地ののはな祭、皆様本当にありがとうございました。そしてお疲れ様でした。心より、皆様のパワーとエネルギーに敬服いたします。まさに、祭や文化祭、学園祭で燃えた後の気分です。新学期が始まり、2 ヵ月足らずでこれだけの事を皆で楽しめることは、まさに青春そのものですね。「大地は、第 2 の青春、周りを気にせず、やりたいことを真剣に楽しむ」と言われますが、青春時代なんて自分でその時代の長さをいくらでも決めれるものでしょうね。

ふと気づけば、お天気に恵まれすぎて、野菜や花、そして、芝生や草の緑が薄く、勢いがない。雨が少ない事に気づきます。昨年は、マイマイガの影響で樹木の葉が根こそぎ食べられて、緑が極端に少なかったですが、今年は少雨のせいで、またまた緑に勢いがないようです。一雨欲しいですね。きっと、緑が勢いを増すでしょうね。

そうそう、文庫祭りで訪れていたイギリス人（きっと、皆さんも気づいていたかもしれませんが）が、すごい嬉しい事を、文庫のベランダで話してくれました。「ここは、自分の故郷、イギリスの光景にそっくりで、久しぶりに故郷を思い出して、感激しました」と。イギリスのどこかはわかりませんが、そう言われると、大地の光景（ちょうど、スタンプラリーの最中でした）が、ものすごく美しく思え、お話に出てくるｽｺｯﾄﾗﾝﾄﾞやｱｲﾙﾗﾝﾄﾞの情景とマッチしてしまいました。それは、きっと、手を入れて環境整備している賜のみならず、一番は、ここに集って楽しんでいるエネルギー溢れる人たちの姿がその情景を醸し出しているに違いないと感じました。
そんな情景で育つ子どもたちが楽しみです。

【長野旅立ち】

童 3 月号で、長野帰還というタイトルで、長女が長野へ帰ってきて、半農半Ｘで祖父母の家に住みながら料理をやっていくと言ったばかりなのに、一か月も過ぎた頃に、いつの間にか、別所温泉に住まいを移してしまいました。何やら、産後養生の拠点を作り、ここで料理を作りたいらしい。さすがです。リンゴの跡継ぎができたと言って喜んでいた父親も、「やはり、野乃花はあてにならねえ」とあきれていますが「別所温泉はいい所だ、今度泊まりに行くので、宿をとっておいてくれ」とまんざらでもない様子。

その娘にとっての最大のピンチはホームシック。2 年前ぐらいに「もう、絶対に一人暮らしはしない」と宣言して、妻の実家に転がり込んだり、シェアハウスに友達と住んだりしたはずなのに、今度はどでかい古民家に一人ぼっちらしい。その寂しさに、かなり後悔しているらしく、この直感で行動して、後で冷静になって様々の事に気づくことは、今に始まったことではない。兄弟や知人にぜひ来てほしいと懇願しているらしい。そして、仕事も最初の直感とはちょっと違い、戸惑っているようだが、それも当然必要な出来事であると思っているようで、きっと何とか打開していくことであろう。よって、月曜から木曜日まで上田、木曜の夜から日曜日まで飯綱町という生活が始まった。

木曜日の夕方、段ボールいっぱいに食材を詰めて帰ってくる。もちろん、翌日ののんのん給食の食材である。そのまま、厨房に入り、鬼気溢れる雰囲気で仕込みが始まる。日によっては、音楽がかかり鼻歌を歌いながらやっている時もあるが、真剣にやっている時は、声もかけることが憚るほどの殺伐たる雰囲気もある。食器棚にはメニュー表が貼り付けてあるが、以前はイラストだったような気がする。想像だが、今は頭の中に、その絵があるのかもしれない。その夜は、いつまでやっているのかは、早寝の青ちゃんにはわからないが、翌朝起きてみると、「小人と靴屋」のように、おかずが出来上がり、厨房は綺麗に整然としている。厨房が凛とした雰囲気に溢れているのがわかる。

子ども達に本物を、素晴らしい環境をともちろん、大地は実践してきたつもりであるが、この給食も、ここまで真剣に取り組んでくれるとは想像以上であった。残念ながら、青ちゃんの育ちは、貧しさの中で「食えればいい」という（もちろん、母親は厳しい農作業をしながら、食事を作ってきてくれたが）ものであったので、食事を繊細に丁寧にゆっくりと楽しむという面は弱いだけ。手間暇かけて微妙なこだわりを持って作る味が、子どもたちにどこまで伝わるのかという疑問があったが、子どもたちの食べる姿や会話、言葉を聞いているうちに、やはり娘のエネルギーや情熱が伝わっていることに気づいた。それは、お話や絵本の選択と同じで、「子どもたちに本物を」という大人側の真摯で情熱あふれるエネルギーとそれを受ける子ども達のそれとのマッチングであることが鮮明になった。

また、娘が作っている時は、そばにレシピ本とか参考本がない。何を参考に作っているのだろうと考えると、自分の舌の直感とプロジェクトマネージメント能力だけのような気がする。もしかすると、事前に、出来上がりのイメージができており、それを逆に辿ってきているのだろうか。私が見ていない、気づいていないだけかも知れないが、調味料などを計量カップやはかりなどで、何かを参考にして細かに測っているのもあまり見かけない。というよりも、料理をしている時、気軽に近づけない、じろじろ見ることができない雰囲気があるからである。

そう言えば、私も何か作ったり、創作している時、次々の湯水のようにアイデアが溢れて、それをどんどんイメージして作っていく過程は、一種の麻薬である。直感でどんどん進んでいき、出来上がりイメージが更に膨らんでいき、最初のイメージ以上のものが完成していくことが、感動と喜び（自分自身の）になっていくのである。こうなると、ナルシストの世界になっていくのである。

娘は「常識のある変人」になりたいと願っているし、「本当に楽しい事は、決して楽な事ではない」という数々の名語録を残している。親としても、子ども達から、その人生の姿勢　在り方を学ぶことが多いこの頃である。子育てと言う言葉があるが、最近は、子ども達から育てられているような気がするだけに、子育てと言う言葉は、おこがましくなってきている。そんな娘を始め、子どもたちの今後が楽しみである。

と思いきや、娘が　先日電話でいやに興奮して話している内容が耳に入った。「私って、ウガンダに縁がある！？」どうやら、アフリカのウガンダで友人が食堂を始めるので、それに誘われたらしい。おいおい、今度は、別所温泉から、ウガンダかい。何で、そんな話が舞い込むのだろう。でも、娘の事だから油断ができない。直感と更なる楽しさを求めて行動する娘だけに、ウガンダも冗談では終わらないかもしれない。長男もウガンダで 2 ヵ月ほど孤児院でﾎﾞﾗﾝﾃｨｱをし、高校時代の 1 番の仲の良い友人もウガンダ近くの食堂で働き、帰国したばかりであるし、小中高校と仲の良い子も、外務省勤務でウガンダに行っており、雄飛を通じて知り合った知人もウガンダで働いており　それが、彼女にウガンダに縁があると言わしめている。冗談には聞こえないところが恐ろしい！！